

第9回国土交通中部地方有識者懇談会

【まんなか懇談会】

（第9回議事録）



平成16年12月20日（月）
愛知県三の丸庁舎8階大会議室

- 須田 寛 座長（東海旅客鉄道（株）相談役） -

「幹線鉄道網のける高速性・快速性」は「高速性・快適性」に改めた方が良い



1つだけ、私から大変次元の低いことを申し上げますが、幹線鉄道の高速化・快速化というのがありました。快速化というのは、私どもの商品名に過ぎないのです。「高速化」が良いのです。「快速化」はいりません。快速というのは快く早いのです。高速というのは、快くなく速いわけではありませので、同じことです。快速というのは私どもの方では、急行料金をいただかないということなのです。ちょっとそこが混乱しておりますので、「高速化」でよろしいと思います。あるいは「高速性・快適性」と改めた方が適切な表現になるのではないのでしょうか。

それでは、順次ご発言を賜りますが、特にお急ぎの方で、5時までおられないという方がいらっしゃいましたら最初にご発言いただきたいと思います。よろしゅうございますか。

ご発言の内容でございますが、ただいまご説明願いました全般についてご発言を賜りますが、特にお願ひ致したいのは、本当ですと、総論的なご発言と6つのものについて各条審議をすれば満点なのでございますけれども、とてもそういった時間はございませんので、一括して議題とする次第でございます。全体的なお話であればそのままお話しいただく。項目それぞれの具体的な中味について、項目ごとにお話がございました場合には、第1項目とか第6項目と言っていたかと非常に分かり良いかと思ひます。

それから、最後にこれからの審議の進め方についての議論がございますが、これは一番後にしておいていただきまして別途時間を取りたいと思ひますので、スケジュールは別に致しまして、総論的なお話、ないしは6つの柱に係るご質問を順次拝聴してまいりたいと思ひます。

— 桑田宜典 委員（（財）岐阜県民ふれあい会館理事長） —

都市と農山村の均衡ある発展という視点を大事にして欲しい



前回のときに欠席をしまして大変失礼しました。全体に渡ることかと思ひますが、最初にお願ひを申し上げたのは、都市と農山村の均衡ある発展という視点も大事にしてくださいと申し上げたわけでございますが、今、農山村が置かれている状況は非常に危機的な状況にあるわけでございます。

特に、食料自給率の問題、農山村では、担い手の高齢化によりまして耕作放棄地が増加しております。それから、ご案内のように森林が非常に荒廃してしまっているわけです。

今こそ中部の産業が、どのように農林業を支援して行くか考える時

そうした中で、特に農山村文化、生活、あるいは産業の基盤であります農林水産業の現状を本当に真剣に見つめ直すときが来ているのではないかと思ひます。農林業がベースにあって現在の産業があると言っても過言ではないのではないかと。特に、農山村から非常に多くの人々が都市に流入しまして、経済発展を支えてきたわけでございます。

今こそ産業が、特に中部の産業が農業をどう支援していくかということを考えていただかな

ければならないと思っていますわけです。

そういう意味で、色々な所に幅広く言葉としては出てまいっておりますけれども、いわゆる都市と農山村の連携が非常に大事になってくるのではないかと。農林業が元気になれば地方もまた蘇りますし、過疎と過密の問題も改善されますし、ひいては日本全体が最も良くなると思う。

国土保全の観点からも農林業の活性化が重要である

また、さらに国土保全という面からも非常に大事なことでございまして、この美しい国土が保全されますし、自然と共生することができれば観光という面でも一層発展すると考えているわけです。その手段としては色々考えられますけれども、ぜひともそういう視点に立ってご配慮いただければ非常にありがたい。

特に岐阜県は83%が山林でございまして、その狭い中で山は国土を保全し、農地を耕すという意味でも大きな役割を果たしておりますので、岐阜県とは書いてございませぬけれども、そういう視点からお触れいただきますと、これが公表されたときに農山村の皆さんが「我々についても配慮してくれている」と考えていただけるのではないかと思います。よろしくお願いします。

- 奥野 信宏 委員（中京大学教授） -

世界中から一級の人喜んで集まってくる地域になることが重要



前回色々と発言をさせていただいておりますけれども、良くおまとめいただいて、その点については特に付け加えることはございませんが、全体の分として、この地域の戦略として、世界から研究者でもビジネスマンでもそうなのですが、一級の人喜んで集まってくるような地域になっていくことが重要です。海外の企業が、どういう人材をこの地域へ送り込んでくるのかという視点に立つことが重要だと思います。

具体的なプロジェクトの中でも良いのですが、直接「環境」も入れていただくと良いなと思います。

産業集積だけでなく名古屋は頭脳都市を目指すべきである

いずれにしても、この地域がモノづくりにこだわってきて、今振り返ると日本の発展のリーダーシップを取ってきたし、世界有数の産業集積になってきた。名古屋の魅力という観点では、名古屋に行けば優秀な頭脳があると言われるような頭脳都市を目指してはどうでしょうか。これまで名古屋はあまり注目されなかった。今になって、半世紀我慢して、やっと名古屋が注目されるようになったわけです。

いずれにしても、中部地域がリーダーシップを取っていけるかどうか。今が、一つの正念場に差しかかっておりますので、次の最終報告のところで戦略的なプロジェクトが出来上がれば良いと思います。

- 小笠原 朗 委員（日本政策投資銀行東海支店長） -

人・もの・金の総合的な支援プラットフォームが必要不可欠



6つの項目順に気づいたことを申し上げさせていただきます。

1番の持続的な成長力の高い産業の強化では、産業クラスターの基盤の例示としてこういったことが書いてございます。ネットワークと生産拠点、立地、人・もの・金に関する総合的な支援プラットフォームという言葉しか思い浮かびませんが、そういったイメージのものをビジョンとして具体的にイメージしていく必要があると思います。支援プラットフォームをさらに具体的に言いますと、お金という面ではファンドのようなものですね。各ブロック都市で、大がかりな産学連携スキームの中に支援プラットフォームがある、というような印象を私は持っておりまして、そういうのが中部圏は遅れている。それからもう1つ、都市型サービス産業の集積が、支援プラットフォームの中には必要不可欠であり、そのような集積が進んでいないという点にも着目して戦略を検討するべきだと思います。

人材の確保では、産業を支える熟練労働者、熟練技能者の育成や退職者の活用が重要

もう1つ、この項目の中で、人材不足、特に産業を支える人材確保という点では、一時的な問題と構造的な、長期的な問題があると思いますが、特に熟練労働者、熟練技能者などと言われるそういう人を域内でどう育成するか。あるいは、もしかしたら熟練のシルバー人材の活用も想定した取り組みが大事だと思っております。

大交流時代には、観光客だけでなく働きに来る人の為のライフライン整備が必要である

2番目の大交流時代のところですけど、主として観光という視点でまとめられていると思うのですが、観光で来る人と働きにみえる人にも焦点を当てて、働きに来られる方々のライフラインをどう整備するかということで、例えば子弟の教育環境などの充実を図ることが必要だと思います。

快適性を得るためには安全・安心に加えて景観の規制・誘導が必要である。

それから、どこで言ったら良いのか、5番目か6番目だと思いますけれども、快適というのは安全とか安心というイメージだけでなく、景観も重要な要素だと思います。景観というのは環境規制などに比べますと規制が一番難しい分野かなと個人的には思いますが、この地域を魅力的なものにする上でこの問題は避けて通れないと思いますので、そこには一段強い規制とか、あるいは強いリーダーシップ、特区みたいな形、その辺を想定したような取り組みを盛り込めたら上手く誘導できるのではないかと思います。

- 東 恵子 委員（東海大学短期大学部教授） -

中部国際空港の開港によって名実ともに中部が日本の中核として意識されるようになる。



中部国際空港の開港を間近に控えて、いよいよ中部は日本の中央になったと思っている次第です。今までは東京が中心、そして関西で、まんなかには挟まれてました。特に静岡なんか通過点だと言われながらきているわけですが、いよいよ中部が中核だと意識できるのも国際的に開かれた中部国際空港の開港があって実感している次第です。

この6つのビジョンは、それぞれ魅力的なものです。特に私は観光の

点から、美しい景観づくりをすすめていただきたいと思います。先般、特に谷岡先生からお話があった国土マインドというお話も大変印象的でした。

歴史や伝統文化に磨きをかけて、中部独自のおしゃれな観光地を目指すことが大切

おしゃれな観光地を目指してという話を、考えておりました。中部は、「おしゃれな観光地？」というおしゃれがあるのか。どのように工夫したらおしゃれになるのかと、課題にしてまいりました。

私は今までに無いようなおしゃれ、それは、中部の特徴はモノづくりです、というとなんか車産業などがリーダーシップを取ってますが、歴史的に見ますと陶器がございいます。瀬戸とか常滑、六大窯業地の内の2つがここには伝統文化として残っております。それから、伊勢の特産品や大変有名な八丁味噌などがございいます。こちらの伝統文化としての食と酒がございいます。たぶん岐阜や長野に行くと独自のものが残っているのではないかと。地域の魅力としての歴史の観点でモノづくりを捉えて、磨きをかけていくことで、地域の新しい、ここならではのおしゃれな観光地になっていくのではないかと考えています。

泥臭さが魅力の愛知を中心にした中部の地域性が色濃く出てきて、特色と独創性を持つことができると思います。地域の人たちと守り育て磨き上げていくことで景観形成がなされますし、目的観光ではない、結果観光としての地域づくり、本物の良さが生まれてくるのではないかと考えています。

自然、歴史、文化を形成した住民の営みを国づくりに活かせる環境づくりを期待したい。

小布施の町が、観光地として大変有名になりました。小布施のまちづくりでは、暮らしやすさ住みやすさを中心にした地域づくり、まちづくりを行なっています。美しい町、暮らしやすい町、ユニバーサルデザインの施された住宅環境を固守することで、結果として多くの観光客が訪れてきたと伺っております。静岡も特にそうですが、この中部の地域の良さは、暮らしやすさを活かしていくことが大事だと思っています。

特に、美しい安全な国づくりのための国土マインドの育成ということでは、土木ごっこなどでフィールド体験を提供するとありますが、土木ごっこでなくても、国土マインドは形成できるのかなと思います。自然とか歴史、文化、私たちが営みをいかに形成してきたかということ、を、国づくりとして活かしていくような環境づくりが行なわれたらと考えております。

「海」に視点を置いた観光、地域づくりなども視野に入れて欲しい

それから、何よりも私は海との関係を、6項目の中で取り上げていただけていないのは残念です。日本全国を見ますと、瀬戸内海を除きまして、この地域ほど気候温暖な地域はございません。海のネットワークによる観光。海から自然に触れる観光。伊勢神宮では、宇治山田港を中心にして、川、海、港、伊勢神宮の海からの玄関口として、多くのNP0による地域づくりも行なわれています。海路のネットワークを形成できないかといった海を活かす視点も入れていただきたいと思います。

国土づくりのなかで「環境」を軸にした長期戦略を設定しても良いのでは

それから、先ほど奥野先生がおっしゃいました環境についてです。この6本の柱をつらぬく環境軸があっても良いと考えております。環境という観点は今後、企業、産業におきまして、

人の暮らしの観点から不可欠です。中部の国土を作っていく上では、中部の環境をどう持続可能なものにするかという点で国づくりを進めていくべきだと思います。

- 松尾 稔 委員（（社）国立大学協会専務理事（財）科学技術交流財団理事長） -
「国土マインド」は全ての長期戦略を包含する良いキャッチフレーズである



前回申し上げたことは繰り返しますが、国の役割として真の意味での中長期的視点というものは、もう一度だけ申し上げておきたいと思います。

それから、東さんも言われたけれども、谷岡さんが出された国土マインドは、非常に良いキャッチフレーズというか、この6本の柱の全てのものを包含している。非常に含蓄が深いと思うので、これは1から6までの全ての根幹だと思うのです。そういう意味で非常に良い提案をされたと思っております。

それから、そこへ行くまでに一段下りて、地域マインドから始めても良いと思うのです。国土マインドというのは、まさに全ての根幹である。これは地域、ひいては国土が好きであって、愛着があって、誇りに思えて、そしてそこに生活したいというようにこれを作っていくわけですね。

ですから、そういうものの仕掛けを、特に国交省は官官の協議も含めて、地方自治体も今日出ていらっしゃるんですけど、そういうところも含めて、教育の問題も全て含めて掘り起こしていくというか、自然にそういうものが出てくるような仕掛け、それが具体案になってくると思うのです。非常にきれいに書かれていて非常に良いのですが、具体的に優先順位をつけて何からやっていくかということを示していただきたい。

自然発生的に地域がリーダーシップを発揮して実践できるような仕掛けづくりが必要

自然発生的にそういうものが出てくるのが一番良いですね。リーダーシップというのは、私もよく言ってきたのですが、横着な言い方をするとリーダーたるべき、国交省でも良いですよ、やりたいと思うことをこうやりなさいと言っているのは、これはリーダーシップではないのであって、人々が本当は俺が初めから考えていたことであって俺自身がやりたいことだったんだと思っていただけるような仕掛けをしていく。それが具体案になっていくと思います。具体的にお話しすることは次の機会があったら申し上げたいと思いますが、国土マインドは全ての核で、自然発生的に地域がリーダーシップを発揮して実践できるような仕掛け作りをする必要があると思います。

- 水尾 衣里 委員（名城大学助教授） -

戦略はパンチのある強烈な印象を与えるような言葉で提言した方が良い



説明に来ていただきました折に細かいこととお話ししまして、それをほとんど直していただいているので、どうもありがとうございました。

全体的な印象としては、戦略というには書き方が優し過ぎるのではないかという感じがあります。

例えば長期中期にしても、戦略として提言するからには、万博、空港に見劣りしない、インフラができあがったら今度はそれを使ってどうやっていくのかというソフトの部分で、もうこんなことをやろうとしているのかと、他の地域がびっくりするようなくらいのパンチのある提言ができた方が良いのではないかという感じがします。それが「国際化」「魅力」「美しさ」「広域性」といった優しい言葉に置き換わるのですけれど、もう少し強烈な印象を与えるような言葉に変えて、具体的な内容を盛り込んでいけたら良いのではないかと思います。

国土マインドを育成するための新しい教育システム、人材育成システムを提言してはどうか

例えば6番の「美しい、安全な国づくり」のところですが、総合学習の時間なんかに行っている土木ごっこ、建築ごっこなどは何年もやっていて、それでは効果が無いということが徐々に分かってきているわけで、本当に国土マインドを作るにはどうするか。もう次なるシステムを提言する所に来ているし、この地域がそれをするによって他の地域からお手本になるようなことがあると思うのですけれども、今回の災害を見ても分かるように日本は常に戦時下にあるような国土の中にあるわけで、そういうことをどう意識し、どう考えてもらうかということは、やはり強烈な教育システムの下に行なわれると思うのですね。良い表現が見つからないので、表現は悪いのですが、徴兵制ではありませんが、義務教育の間に何年生になったら夏休みに必ず行かなければいけないというようなシステムを他省庁と一緒に作って上げていってこそ、初めて国土マインドが育成できるわけで、甘い言葉で言っているのではなくて、そういうちょっと強烈なソフトを提言していくことも含めて考えていただければ良いのではないかと思います。

ここは製造業の集積地でもありますし、科学技術立国を目指す上でとても重要な地域なので、そういう人材を育成していくということのベースに立った上で、国土マインドをこの地域で具体的にどういうふうに進めていくのかということが書き込めていけば、インフラの時代が終わって、今度はそれをどう使って、どう発展していくかというときに強烈な印象を与えることができるのではないかという感じがしております。以上です。

- 水谷 研治 委員（中京大学理事・大学院教授） -

産業クラスターは形成するものではなく、産業活性化の結果として形成されるもの。



これだけまとめていただいたのですから、いまさら特に申し上げることはございませんが、3番目の優位性を活かしてというのが、かなり関連しているのではないかという気が致します。1番のためには社会資本の充実が必要なので、それが3番に書いてあるというように解釈しております。

産業の強化と言った場合、ここで産業クラスターの形成という言葉が出てくるのでありますけれども、どんな産業クラスターになるのかというのは、あくまで結果論でありまして、どういう姿にしたいというようなことを考えましても、なかなかそうはまいりません。経済産業省が考えることではございましょうけれども、これはあまりこだわらなくても良いのではないかと。全体として産業が活性化されていったら、できあがったものが一つの

特色のある産業関係、産業クラスターになっているということによろしいのではないかと私は考えます。

ボーダーレス社会での中心機能強化、名古屋の情報発信の強化は敢えて戦略にする必要があるだろうか

それから、ボーダーレス社会の到来というのは、わざわざ言うほどのことがあるのかなと。名古屋の情報発信の強化は、言うだけのことがあるのかしらという感じが実はしております。

快適性を満たしたまちの形成では、整備対象の選択と集中が必要。

それから快適性を満たした町の形成ということなのですが、快適性をあらゆるところで満たすということは、たいへんコストのかかる話であって、もはやそれをやれるだけの財政的な余裕はありませんので、そういったことがやれるかというのをやれませんので、何かに集中していかなきゃいけない。色々なことをやらなきゃいけないけれども、中心になるものに集約していかないと実際には何もできなくなってしまうということを考えております。国家あるいは地域ができることは、以前と違って限界が出てきており、これからさらにその限界は強まっていくだろうと思います。だからこそ、これだけはやるという、何か集中したものということを考える必要があるのではないかと思います。

地域マインド、国土マインドは「愛国心」と言い換えても良いのでは

なお、それをやるにつきましても、松尾先生のおっしゃいました、地域マインド、国土マインドというのはよく分からないのですが、愛国心ではいけないのでしょうか。結局、愛国心だと私は思います。以上です。

- 箕浦 啓進 委員（中日新聞社メディア局長） -

「創造性に富んだ…産業の強化」は「創造性とバランスに富んだ…産業の強化」の方が良い



先ほどご説明いただきました資料を見ていまして、数日前に送っていただいた資料を見て色々考えていたのですが、話をしようと思っていたところが無くなってしまったのです。資料1の長期的戦略の1番の所、「創造性に富んだ、持続的な成長力の高い産業の強化」ですが、実は数日前に送っていただいた資料には「創造性とバランス」というふうに「バランス」が入っていまして、「創造性とバランスに富んだ、持続成長力の高い産業」となっていました。

実は、私がお話ししようと思ったのは、そのバランスに関わる場所でした。バランスが入っているのは非常に良いと思って見ていました。と言いますのは、先ほどから出ておりますが、この地域はモノづくりの地と言われて、それが原動力で名古屋は元気が良いと言われているのですが、しかし考えてみれば10年くらい前までは、製造業は途上国に市場を奪われて、先進国では産業空洞化が懸念されていたわけですね。それが今、こういう状況になって、少なくともこの地域に限っては非常に優勢だということですが、ただ、基本的な構図は変わっていないと思うのです。日本とか先進国では、全産業に占める製造業のウエイトは低下していくということが根底にあると思います。

ですから、モノづくりはこの地域の特色ではありますが、製造業イコール産業といったようなイメージになっていくと、20年先、50年先を考えた場合、いかななものかという感じが致します。

今、鉄鋼業界をはじめ産業界では、鋼材不足が大きな騒ぎになっております。こちらに自動車産業のトップの方がおみえになっていますが、建設も家電も、ほとんどの産業で非常に大きな問題になっています。これも一過性のものというより、背景は中国の産業が爆発的に伸びてきていることがあります。これを最近「爆食」というのですか、爆発的に食う「爆食」と表現しているところも出ています。これは、鋼材だけではなく、もし中国が原因ということであれば、これから石油も足らなくなるだろうし、他の資源も同じです。

モノづくりだけでなく、他の産業についてもしっかりした戦略を考えていく必要がある

そのようなことを考えてみますと、確かにモノづくりはこの地域にとって生命線ですが、それと同時に、他の産業についてもしっかりしたものを考えていく必要があるのではないかと考えます。もともとこの地域は、産業構造については分散させてきたと私は思っています。例えば愛知県の場合を見ますと、名古屋の中心部はほとんど商業と金融だったのですね。モノづくりをする工場とか研究所は大体名古屋の近郊。さらに、その先に行くと非常に広大な農業地帯があって、それぞれ第1次から第3次までの産業が、それなりに全国有数の力を持っていた。そういう中で、先回も言いましたが、名古屋の商業、金融が少し弱ってきている。このあたりをこれから考えていく上で、強いところはより強くしていく、あるいは持続していく。その一方で、他のところにも十分目配りした産業育成策が必要ではないかと感じます。

中部国際空港の開港を契機に新たな視点に立った集客施設を整備して観光産業を育成すべき

中でも、今問題になっている金融とか流通、それから観光ですね。観光も愛知県では産業だとは思われていませんが、国によっては大きな産業ですし、むしろ観光が産業と認識されるようになっていくにまで育てていかなくてはいけないのではないかと考えています。

観光といいますと、どうしても見る観光とかそういうふうに使われがちですが、来年2月に中部国際空港がオープンする、これによって観光客が中部国際空港に降り立つわけですね。特に中部国際空港は世界のハブ空港だということで、海外から国内各地、あるいは遠隔地から中部各地への中継空港として、観光客やビジネス客を集めるとしています。その観光客がたとえ愛知県を通り越して他の所へ行ったとしても、しかし通過するだけでも観光の資源になるのではないかと。例えば中部国際空港に隣接してホテルが建てられていますが、このホテルもとても今の客室数では足りないのではないかとこの嬉しい悲鳴を上げていると聞きますし、それから、空港内のショッピングゾーンや飲食街には人が殺到しそうだということが出ています。

それだけではなくて、観光客が乗り降りするだけでも、通過するだけでも、タクシーやバス、鉄道など交通機関の利用が増えますし、有料道路の利用者も増える。さらに、乗り継ぎの途中では、名古屋あたりで食事や買い物をしてくれるかもしれない。むしろ、そういうゾーンを作れば、新しい観光地ができるのではないかと思います。

例えば、九州へ行ってみますと、阿蘇とか雲仙は大観光地ですが、阿蘇とか雲仙に行きます

と、阿蘇の火口とかそういう所よりも、一番たくさん人が集まっているのは、その周辺に大変大きなお土産屋と食べ物屋、それに温泉町なども、とてつもなく大きな施設で、単なるお土産屋というよりも大ショッピングゾーンができております。実はここに一番人が集まっている感じがします。別にここへ買い物だけのために来ているわけではないでしょうが、観光に来て買い物というのは非常に大きな要素になっている。

そういうことを考えれば、この地域で見る観光地は一朝一夕にはできませんが、知恵をしばればこの地域ならではの観光客の集め方、あるいは観光の取り方があるのではないかと。産業観光で生産現場を見たり生産物を買うのも一つの観光になると思いますし、通過観光といいますか、そういうようなものが一つ考えられるのではないかと。

実は、愛知県と岐阜県の境にあります川島町の河川環境楽園ができて以来、たくさん人が集まっています。ここは高速道路ができて、通過点というだけだったのですが、そこに淡水魚園を作ったり、色々な食べる所を作ったり、家族で楽しめるような公園を作ったりして、そうしたら非常に人が集まって、全国でも有数の遊園地みたいな状態です。そういう新しいものを考えれば、観光というのはもっと幅の広いものができるのではないかと感じます。

いずれにしても、色々な産業を将来に向けて育てていくのが、まんなかに位置する中部の一つの生きる道ではないかという感じを持っています。

—渡辺捷昭 委員（トヨタ自動車（株）取締役副社長）—

世界一、日本一のものが中部から生まれるような長期戦略にして欲しい



3つほどお話しさせていただきます。あまり出席してなくて大変申し訳ないのですが、今お話をお聞きしておりまして、1つ目は中部をどんなイメージの地域にするのか。国際化、美しさ、広域性、多様性、連携、あるいは6つのプロジェクトの長期戦略と書いてありますけれども、これが中部全域という意味ではなくても、世界に誇れる中部のイメージとか、あるいは、世界ナンバーワンとか日本ナンバーワンの何かが出てくる中部なんだということをイメージできたら一番良いなという感じがしております。

例えば、1番の「成長力の高い産業の強化」という部分でいけば、技術開発力のナンバーワンのものが毎年とか3年に1回出てくる、高い技術力を持った地域なんだというイメージが、もう少し分かりやすく出てこないか。

あるいは大交流というお話ですと、中部地区に外国からの観光客が20年後には1,000万人くらい来る地域にするんだとか、そういうようなイメージ。あるいは地域で言えば、安全とか安心、快適というお話がございましたけれども、安全、安心、快適度ナンバーワンの地方都市なり地域が4つも5つもありますよとか、そういうような地域にするのだという宣言ができるのもとても良い。そのためにどうするぞということで、ここに書いてあるような具体的な方策が出てくるのかなと思います。

これは次のステップなのかもしれませんが、これだけまとめていただくとそういうことを明確に出して、勇気がいることだと思いますけれども、しっかりしたビジョンとか目標、方向を出して、夢も含めて、それを一生懸命達成するのだという努力が出てくる。鈴木委員がいっぱいしゃいますけれども、車で言えば、走れば走るほど空気がきれいになる車を作るとか、あるいは人を絶対に傷つけない車を作ることが我々のミッションだとすれば、そういうことを掲げながら具体的に何をしていくかということを考えていくというような意味で、どんな中部にしたら良いのかなというふうにしていけたら良いなと思います。

おそらく、これからは環境と安全と情報通信の技術とか、あるいは生活が大事になっていくだろうと考えれば、住みやすい、環境の良い町がこの地域に見つかる。安全で、交通事故死者ゼロの地域が10も20もできた、とかいうようなまちづくりをしていく。その情報の発信基地が中部にある、ということになるととても良いのではないかと、こういうまとめ方をさせていただくと感じました。

産官学が一体になって、日本一世界一の地域をつくるためのモデル事業を作ると良い

2つ目は、そういうことをするために産官学が共同して、何らかのテーマを持ってモデルを作ると良いと思いました。実験的に、あるいは特区というお話もございましたけれども、そういう形で産官学一体になって地域づくりを目指すのだという、進め方の方向性もこういうところを出したらいかがかという感じが致します。

中部を発展させる優秀な人材を育成するための戦略が必要

3つ目は、それを支えるのは、やはり人づくりだろうと思います。人材の育成という観点で、

この中に包含されているのだらうと思いますけれども、もっともっと中部地区からすばらしい人が、頭の良い人という意味だけではなくて、色々な意味のすばらしい人を輩出しているという、そういう施策を何らかの形で表現したい。やはり人をしっかりと育てていかなければいけないのではないか。特に、20年後、50年後を考えたら、今から人づくりを一生懸命しなければいけないのではないかという感じが致しますので、そういう宣言を入れていただいたのかなと理解します。以上でございます。

- 中村 幸昭 委員（鳥羽水族館館長） -

イワシのいない伊勢湾の水質は危機的状況である



国交省は文字どおり空陸海の三位一体ということで管轄をしておられます。中部は、言われて久しいのですけれども、産業の集積もあるし、交通体系も進んでおりますし、インフラ整備も進みつつありますが、一方、目を海に転じていただきたい。

私たちの住む地球は、46億年前に誕生して、30億年前に全ての命は海から生まれました。海は生みの母である。そのお母さんである伊勢湾が泣いているということを訴えたいと思います。

我が国の最大の内湾は伊勢湾であります。肉眼で見ると一般の方は伊勢湾がきれいと思われるかもしれませんが大間違いであります。実は浅いたらいと同じでございます。一番深い所は伊良湖岬と鳥羽の間の伊良湖水道が85メートルあります。それ以外は浅い所で10メートル未満なのです。ですから有限なのです。

かつては工場汚水が流れて汚れた。今はそれは規制されましたが、家庭から依然として生活汚水が流れております。特に洗剤が最も大きいですね。生物の実験で分かるのですが、毎日使っております練り歯磨き是有毒性でございます。ウニの奇形もたくさん見られております。膨大な量が伊勢湾に流れているという事実を、もう一度、環境省だけではなくて、地域の住民が考えなければならない。我々が吸っております酸素は、植物から出ているのではなくて、植物は40%で、海から60%出るオゾン吸っているわけでありまして、経済的な富だけではなくて、健康とか快適とかアメニティに関係するわけです。観光は五感を満足させるわけでありまして、変な臭いがするとか騒音があっても困るわけでございます。

きれいな海を復活させる。かつて伊勢湾は、イワシが最も多い、三大漁場の一つだったので、海の汚染と乱獲によって見る影もなく、イワシはほとんどいないわけですね。イワシは海のコメでありますから、コメがなくなればアジとサバもいなくなる。食物連鎖の世界では当然のことです。かつて、名古屋や四日市の近くまでイワシの大群が来ていたのです。秋になりますとサワラという魚が高速で遠州灘や伊勢湾に入ってきて、イワシの大群を追いかけてきたのですが、サワラの方が危険を感じまして、センサを持っていますから、名古屋や四日市の所はヘドロだらけですから、おっかないというので津や松阪の沖でUターンをして返っていくのですよ。触らぬ神に祟りなしというようなことで。こんなことで一体どうなるのか。イワシがいないということは、つまり私たちの海が泣いている。

伊勢湾台風がありましてから、これは当時の建設省でしょうけれども、護岸を作ったわけですね。コンクリートで固めた。大失敗でした。歴史的な大きな失敗だった。護岸を作ったために、テトラポッドを放り込んだのですね。砂の流れが変わって、白砂青松の砂浜が無くなった。白砂青松今いずこと言っているのですが、そのために、伊勢湾沿岸を見てください。愛知県、三重県は人工海岸が6割でありまして、自然海岸は4割しかない。かつて、我々が子供のときは「海の子」という歌があって、海はどこへ行ったのかということでございます。

そうすることで、寄せては返す渚が復活しなければ健康とは言えない。というのは、沖から押し寄せる渚というのは、7つ波がある。6つは小さい波でありまして、大きな波は1つであります。これが1週間ですからね、そして、それが4つ重なって一月になるという自然の循環があるわけです。

海がきれいになることが、私達の喜びにもつながる

そうすることが肉眼では見えない。海底のヘドロの問題は、人間がミクロの世界まで近づかないと分からない。海が快適でなかったら我々は幸せとは言えないだろうと思うのですね。イワシとかそういう小型の魚が減りましたから。ピラミッドの頂点にいるのはクジラの仲間ですナメリというのがいます。1メートル80センチですから。これは現在調査しておりますが、三河湾と伊勢湾だけに3,700頭いることが分かりました。そのクジラたちが生きる、生活サイトがそこにあることが望みでございますから、セントレアができて、津とか鳥羽の方も海上アクセスの船が通りますが、空から見た場合、クジラの群れが見える、あるいは船で行ったときに見えるということになれば、それは大きな喜びにつながるのではないかと思います。

渚を復活して海をきれいにすることが、空も陸も森もきれいにすることにつながる

護岸は、コンクリートやテトラポッドはやめてもらわなきゃいけない。渚は陸上から来た汚染された物質をきれいにしてくれる、巨大なクリーニングタワーである。その渚の復活をしなければいけない。それを渚の文明論と言っていますが、それと同じようなことで海も、陸も、空も、全体としての連鎖の社会ということで、国交省さん、環境省等色々な役所があると思いますが、横断的に各省庁連携を密にして海をきれいにすることが、陸も、森もきれいにすることにつながるという視点をぜひお願いしたいと思います。

- 谷岡 郁子 委員（中京女子大学学長） -

国土マインドとは、自分を取り巻く環境の健全性や美に対する成長を伴った感受性のこと



まず、今回はすばらしくまとめていただいたと思っております。国土マインドという言葉をあいう形で取り上げていただいてありがたいと思っています。

私は、愛国心と国土マインドは違うと思います。愛国心はやはり国家とか国民というものを想定していると思います。

国土マインドは、そうではなく、先ほど松尾先生がおっしゃったように、自分の家庭の周りから始まり、地域であり、そして国へつながるような形の、自分を取り巻くこの世界に対する愛着心やそれを見る見方、感じる感じ方の成長を伴った形だろうと思い

ます。ですから、形を含めての美しさ、それに対する美意識、感性、あるいは、その状態の健やかさに対してのセンシティブティ。こういうものを含んでおりますので、愛国心というものではなく、別のものであると考えております。

中部は身近なところで国土を感じることの出来る地域であり、そこが東京や大阪と大きく異なる特徴だ

国土マインドをまんなか懇談会で出ささせていただいたのは、中部という所が国土を感じる所だからでございます。よく矢作川とか木曽川の上流の方まで行くのですけれど、名古屋という大都市のこれだけ至近距離で、例えば矢作川水系で考えてみますと、矢作のかなり下流の所から稲武のような上流まで、これが一つのシーンに収まってしまう。国土の形が一つの市の中で見えてしまうような状況です。これは大阪とか東京では絶対にあり得ない状況だと私は思っています。阪神間あるいは東京にいますと、国土というものを感じる事が少ない。ところが中部にいますと、生活していて国土というものを感じてしまうわけです。それが国土マインドという言葉につながっているわけです。

先ほど東先生がおっしゃったように、装飾的なもの、華美なものを付け加えたものではない、あるいは京都の友禅のような華やかさではない、木綿的な、しかし本質的なもの、こういう国土の形が中部にはあると思っています。そこが本当にすてきになり得るのだと思って、この間、おしゃれという言葉を使わせていただいた次第です。

農山村問題は都市対農村という対立構造からではなく、物や人の循環という視点から解決策を見い出したい

私が印象的でしたのは、先ほど桑田委員から出ました農山村の問題です。この荒廃した国土。おそらく今回の台風がこれほど大きな災害をもたらしたのは、あるいは、新潟の地震で大きな災害をもたらしたのは、やはり山、そして護岸の保水力であったり、あるいは土を保つ力であったりするものが失われるような森林の荒廃、山の荒廃というものが相俟ってああいう大きな被害を及ぼしたのではないかと感じているわけです。やはり、手入れされていない山間部というのは、先ほど桑田委員がおっしゃったとおりの状況になっていると思います。

ただ、この問題はベクトルを変えないと解決ができないと思っています。つまり、工業対農林水産業、業対業の争いということではない。あるいは、大都市対田舎、どっちが資源を持っていけるか、どっちの要素が新しい計画の中に盛り込まれるかというような、そういう観点では解決できない。物資、資源、人の循環をどう確立するか。例えば、酸素や水の大きな循環という視点から、それぞれが密接に関係しあっているという考えに立つ必要がある。名古屋市役所の視点ではなかなか出てこない。今度の選挙に使われるマニフェストなんかを見ておきますと、子供が遊ぶ環境が必要だ、自然が必要だ、ここまでは私の主張と同じなのですが、そのあと、だから名古屋市内の児童1人当たりの公園面積をどこまで増やすんだみたいなことが書いてある。こういう市域のバウンダリの中で解決すべき問題ではない。私が市長候補なら、バスを何十台か買って、山間部へ名古屋の子供たちを連れて行って、国土を感じさせるような状況を作り出すだろうと思います。

ですから、市役所のバウンダリの中ではできないようなことを国交省あたりでおやりいただ

きたい。先ほど松尾先生がおっしゃったとおりで、国土というものは全体を見ようと思っても見られるわけではないので、具体的なものから始めなければならないとするならば、一つの水系の上流と下流をどう交流させるか。そして、上流と下流の際にある里や山がどう交流するか。愛知県の資源の中でいえば、山と川と里と海をつなぐというような市民運動を起こしたいということで申し上げました。

国交省が、林野の保全については一部しかやれない。あるいは、里にある農地や市街地については管轄が違う部分もある。これを一体的に見なければ、私たちは良い国土、美しい国土を作っていくという状態にある。こういう時代に入ってしまったときに、どういう形でそれがやれるのかという問題になっているのだと思います。

国土づくりはそれを担うNPOへの支援や適切な誘導が重要になる

国土という言葉をあえて使いましたのは、国土の一部である地域づくり、国土づくりへのNPOの支援体制がそこから出てきしはしないか。先ほどのお話にもありましたように、今の国土の防衛というのを、外敵からの防衛という以上に天災を含め国土の荒れ果てた状態に対する内的、これを国民ぐるみでどうやるかという問題で、私は徴兵制度とか強制的なものに対しては断固反対する立場を取る人間ではありますが、うまく誘導することによって、そういうことをやってくれるNPOはたくさんあると思います。また、平成の市町村合併が今後、続々行なわれていく状況の中で、特に山間部の今まで村役場、町役場であったところの機能が失われてくる。こういうものを補完するようなNPOの立ち上げであったり、それに対する支援が大きくなるのではないかと。

定年退職のUターン者を活かすことで矢作水系は農山村再生のモデル地域となりうる

先ほど、渡辺委員からモデル都市を作るとのことのご指摘がありましたけれども、あえて私がここで提案させていただきたいと思いますのは、矢作水系、特に豊田市の部分、かつて稲武などから若者がたくさん豊田に出て行って工場で勤めていた。この人たちがこれから続々と定年になって故郷に帰ってきます。活きのいい若者を取っておいて、おじいさんを返すのはどうかと思いますが、それでも、先ほどの資源の循環ということから考えれば、人を循環させて、こういう人たちが山へ入るような状況も、例えば民間も含めて、あるいは企業さんの応援を得てやるということであれば、NPOの役割も随分変わってくる。直ちに役に立つようなところまで来ています。これまで自分たちが放置してきた問題に対する認識。そういうところに税を投入するようなことに対する応援。そういうことを含めて今後、幾つかのモデルプロジェクトが出てくると良いなと思います。

—鈴木修 委員（スズキ（株）取締役会長）—

中部の縮図である浜松の将来ビジョン作成に本ビジョンを参考にしたい



私も実は欠席ばかりしておりまして、皆さんにご迷惑をおかけした立場でございますが、今日まとめていただいたものを拝見して、これを参考に浜松の方をどうしようかと考えているところでございます。

と申しますのは、ご承知のように中部圏はまんなかとなっていますけ

れども、浜松、静岡県西部地域はまんなかの端なのであります。今、静岡県で問題にされているのは、道州制が敷かれたときに静岡県が2つに分かれて、股裂きになるのではないかなというように言われております。どちらについても端っこであるという状況でございます。

そういう点から、浜松、西部地域はモノづくりが中心になっておりますものですから、どうしても20年、50年先もモノづくりで生きていくのだという指向が非常に強い。こういふことでございますから、皆さんのまんなか指向の、国際化、魅力、広域性を縮図にして、西部で力を挙げたら一つのものになるのではないかな。こんなことを思っております。

花博成功のカギは、交通アクセス、くちコミ、来場者を飽きさせない工夫、ボランティアの活躍にある

この間、花博をさせていただきまして、大変皆様にお礼を申し上げなくてはいけないわけですが、目標の500万人を超えて544万人だったということと、中部地区で全体の入場者の約30%近くを占めていただいた。それから、6,000種類の花を5回、500万鉢、5回植え替えた。5回入れ替えたと同じでございまして、したがって回数券を買われて入られた方々が10万人あった。これは淡路島では3万人しかなかったのが、浜松では10万人。それは花を5回入れ替えた。だから5回、大会をやったようなものだと思います。

花博が成功したのはなぜかという、これはやはりアクセスなのですね。人口が減ろうが増えようが、何かやるという、やはりアクセス。名古屋を中心に道路アクセスがやっぱり中心になってくる。1日の最高が9万人をちょっと越えたのでしょうか。平均は3万人くらい。ほとんど交通渋滞なく会期を終えることが出来ました。

もう1つは、ご婦人の方が多かったわけでございますけれども、くちコミ、コマーシャルよりもくちコミの効果が圧倒的に大きかった。

それから、会場内の展示内容に変化を持たせ、来場者を飽きさせない工夫を施したということがございますし、大勢のボランティアの活躍も見逃せない要素かと思えます。

そんなキーワードが出てきますと、20年、50年先も、何をやるにしてもそんなところがやっぱり重要になるのかなということを、つくづく経験を通じて思ったところでございます。端っこの方から頑張りますとお誓いを申し上げて、私は意見は出せませんが、よろしくお願いをしたいと思います。

- 須田 寛 座長（東海旅客鉄道（株）相談役） -

ありがとうございました。以上で一通りご意見を承りました。大変多岐にわたるご意見、しかも非常に突っ込んだ、また非常に深いご意見を頂戴し致しましたので、私なりにご意見を要約すると、これから申し上げるようなことになるかと思えます。

まず総論的な方でございますけれども、大体5つの意見であろうと思えます。

中部が全ての分野でナンバーワンを目指すことをアピールする。そのために人材教育が重要

1つは、人が喜んで来る中部、世界に誇れる中部にしたいというのが、本提言の全体を流れ

る考え方でなければいけない。

そのためには、やはりナンバーワンというイメージを全ての分野にわたってもっと強烈に打ち出すべきではないか。そしてまた、産官学連携のモデル地域でもあるべきだろう。色々な技術にしても何にしても、やはりそういったことが必要だ。そのための裏付けとしては、やはり人材育成が非常に大事である。教育問題が重要であると思います。

国土マインドの醸成が将来のまちづくり、国づくりにつながる

2番目でございますけれども、国土マインドについてお話を頂戴致しました。自分の周囲を見回して、その中から自然に出る発想が結果的に、将来のまちづくり、国づくりにつながっていく。そういう流れが中部を作るときに非常に重要なのではなかろうか。

そして、その中で、都市ないしは農村のバランスを取るというご意見がございましたけれども、そのための手法と致しましては、人や物の循環のより良き解決ということから答えが出てくるのではないかと。そういうふうな国土づくりの心といいますか、そういうものが地域づくりの基本になるということが改めて確認されたように思います。

「戦略」にふさわしいパンチ力のある表現を用いる

次に、3番でございますけれども、戦略という言葉を使っております。戦略にふさわしい強烈なパンチ力、そういう主張がもう少し強く出ても良いのではないかと。特に教育の問題とかそういうことについて主張がもう少しあって、強いパンチを与えるものがあっても良いのではないかとご意見がございました。

地域づくりの基本的な柱に「環境」を位置づける

それから、環境については、これからの地域づくりを考える基本的な柱として、環境を位置づけるべきであるというお話しがございました。

花博成功のカギは、情報、交通アクセス、ボランティア活動と来場者を飽きさせない工夫にあった

そして、最後に、花博のご成功の一つのカギと致しまして、イベントについての情報、アクセス、ボランティアの活動、変化、そういうものが非常に重要だというお話し。内容に変化を持たせて来場者を飽きさせない工夫と、ボランティアの参加が成功のカギであるという、実態に即したご経験に即した貴重なご意見を頂戴致しました。

次に、項目ごとのご意見でございます。

長期戦略1には、人、もの、金の支援プラットフォームが必要

第1項目でございますけれども、これにつきましては、人・もの・金の支援プラットフォームが必要であるというご指摘がございました。また、創造性とバランスという表現がございまし

て、その中のバランスが特に重要だということかと思います。それから、項目の1と3について、関連連しているような項目があるので、これらについては表現上、つながりをうまく表現していただくと良いかと思います。

長期戦略2には、食文化、伝統文化を活かし、買い物を重視した観光地づくりが必要

第2の項目でございます。

観光地づくり。これに関しては、具体的に3点、1つは食文化、それから伝統文化も活かした観光が重要である。産業観光につきましては、製品のショッピングも楽しめることが大変重要であり、土産物が充実しているということが案外大きな観光の要素であるので、そういうところに着目した観光地づくりも必要とのご意見でした。

長期戦略5には、快適なまちづくりを進めることが観光の発展につながるという観点を加える

第5項目でございますが、観光を通じて暮らしやすいまちづくりを進めるという観点を、具体的に施策として盛り込んでどうかというご意見もございました。

長期戦略6には、教育改革、国づくり、景観形成、地域がリーダーシップを発揮できる仕掛け、印象に残る表現、ナンバーワンを目指す、選択と集中、海の重視など色々な意見が出された

6番については、比較のご意見がたくさんあったわけでございます。

土木ごっこという表現がありましたけれども、こういうものから脱皮をして、むしろ次なる教育システムを具体的に提案するところまで進むべきではないだろうか。

それから、もう1つは、世界に冠たる中部を宣言するために、様々な対策を講じるべきであるということ。

それから、国づくりに人の営みが具体的に繋がっていくという観点をもう少し盛り込むべきではないかということ。

景観の保全、修景が快適なまちの形成や、美しくにづくりには重要であるということ。

日常のごく自然な活動が国土マインドとつながりまして、自然発生的に地域がリーダーシップを発揮、実践できるような仕掛けが必要ということ。

中部の特性をもっともっと際立たせて、パンチ力のある表現で提言していただきたいということ。

技術開発力や安全・安心・快適度がナンバーワンの地域であるというイメージを出したいというご意見。

それから、色々な面について重点化、集約化をすべきだ。戦略的に具体化を図るためにはそのようなことも必要だというご意見。

海を大事にする。海に着目して、海のネットワークを再構築するという新たな観点を加えてはどうかというお話しもございました。

以上のようなことではなかったかと思います。